

---

# 青い風船

五十嵐 柊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青い風船

### 【コード】

N9096L

### 【作者名】

五十嵐 柊

### 【あらすじ】

死ネタ／悲恋／独白調

「それじゃあ、またな」

そう言って貴方は微笑んだ。

可愛らしい、足跡のようなえくぼを浮かべて。

そう言って貴方は今にも泣き出しそうな私の頭を大きくてあたたかい手で優しく撫でた。

いつも貴方が近所の小さな子供にするように。

そう言って貴方は掴もうとした私の手をすり抜けて空の彼方へと消えた。

私の心にぽっかりとした穴を残して。

日曜日の午後。

子供連れやカップル、数人の中高生グループで賑わう公園のベンチで私はただ一人、虚空を見つめていた。

少し離れた場所で熊の着ぐるみが色とりどりの風船を配っている。その熊に群れる、無邪気な子供たち。

男の子も女の子も、子供も学生も大人もお年寄りも、さまざまな人で賑わう公園。

しかし、私だけはそんな空気から切り取られたようにじっとベンチに座っている。動くことの出来ない蠟人形のように。

周りの喧騒もふわふわと風に弄ばれる色とりどりの風船も、私の耳に目に、届いているようで映っているようで、届いていないし映っていない。

喧騒は鼓膜を小さく振動させるだけですり抜けていく。

風船は瞳に鏡のように反射して映るだけ。

不意に色とりどりの風船の中に青色の風船を見つけた。  
青。

ほら、この風船、お前にやるよ。

お前には青色が一番似合うから。

ばか。

もうそんな歳じゃないわよ。

恥ずかしいから止めなさいってば。

無邪気な子供に混じって一人、青色の風船を貰ってきた貴方。

恥ずかしいからと唇を尖らせた私だけど、実は貴方に青が似合うと優しい笑顔で言われて嬉しかったのだと、貴方に言ったことはあっただろうか。

それ以来、私の好きな色は青色になったのだと、貴方に言ったことはあっただろうか。

こんなことになってしまふのなら、恥ずかしがらずに言ってあげばよかったのに。

いつの間にか、私は青色の風船を手に使っていた。

私が幼い子供に混じって風船を取りに行ったとき、きっと熊の中の人は驚いた顔をしていただろう。でも、着ぐるみという可愛らしい仮面の上からでは分からなかった。

いつか貴方がしてくれたように、私も子供に混じって風船をもらっていた。

そのことに笑いがこみ上げ、同時に焦燥感や悲壮感が笑いを埋め尽くすほどにこみ上げ、最後に少しの怒りがこみあげてきた。

「おねえちゃん、だいじょうぶ？　かなしそう」

突然かけられたたどたどしいソプラノに、私は我に返った。

見れば、すぐ傍に小さな女の子と男の子がいた。

こんな小さな子供に心配されるほど私は悲しい顔をしていたのか、と少し呆れる。

「大丈夫よ」

取り繕うように、精一杯の作り笑いを浮かべる。しかし、それは失敗して、苦笑にしかならなかった。

「ねえ、おねえちゃん、そのふうせん、ちよおだい」

無邪気な声で男の子が言う。

反射的にさきほどまで熊がいた場所を見れば、熊はもう風船を配り終わったのか姿を消していた。

数秒、逡巡した末、私がこの風船を持っていても仕方ないと思い、小さくうなずいた。

差し出された小さなてのひら。

そのてのひらに風船の紐を握らせようとしたとき、強い風が吹いた。

風船の紐が風に浚われ、ふわりと青色が浮く。

「あ」

漏れた呟きは子供のものか、私のものか、はたしてどちらのものだっただろうか。

反射的に立ち上がり、空に舞い上がる風船に向かって手を伸ばす。しかし、その手は空を切り、風船は躊躇うように私の手元をうろつろつとした後、さらに吹いた風によって大きく空へと舞い上がった。

「ふうせん」

男の子が悲しそうに呟く。

私は男の子の頭をそつと撫でて、  
「ごめんね」

と謝ると風船に背を向けて歩き出した。

目元がじわりと熱くなり、熱い雫が浮かんでくる。

それは視界を霞ませ、とうとう瞳からあふれて頬を伝わりだした。  
それをてのひらで乱暴に拭いながら、ずんずんと歩を進める。

そうやって、いつも貴方は私の手を上手くすり抜けて遠い空へ行  
ってしまう。

これだから、私は貴方のことが嫌いなのよ。

またね、って言ったのに。

いつだって貴方は私の元から去ってしまう。

貴方だって、貴方を思わせる青色の風船だって。

少しは、私の傍にいてくれたっていいのに。

公園から出て行く彼女を見守るように、青色の風船は空色の中で  
ぼつんといつまでも存在していた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9096/>

---

青い風船

2010年10月14日19時24分発行